一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の久能凪人（くのう　なぎと）は兄の航（わたる）とともに、小学生の時はバドミントンをしていたが、中学になってからやめてしまった。しかし同級生の羽野海（はの　うみ）からコーチを頼（たの）まれ、引き受ける。後輩（こうはい）の望月青太（もちづき　あおた）からもコーチを頼まれ、バドミントン部に顔を出すことになる。

冬休み明けから、凪人は放課後、羽野と望月の練習の様子をすこし見に行くようになった。そのほうが、三人で昼休みにわざわざ集まるより①コウリツがいい。

「羽野、連続でスマッシュ打つなら相手のバックとフォア交互（こうご）に狙（ねら）ってみれば？　望月はバックハンドで打つとき、ちゃんと親指立てて」

話の途中（とちゅう）で連続してせきが出た。二階通路の暗幕の近くは埃（ほこり）っぽい。

「風邪（かぜ）？」「大丈夫（だいじょうぶ）ですか？」

二人が同時に聞いてくる。凪人はせきこみながら（1）手を振（ふ）った。

「埃がちょっと苦手なんだ。それだけ。で、続きだけど、望月ってシャトルが落ちてくる場所へ体入れるの速いね。いいと思う」

「本当ですか？　僕（ぼく）、フライ捕（と）る感覚でやってます」

「ほら。野球、役に立ったじゃん」

凪人が言うと、望月は嬉（うれ）しそうにうなずいた。野球の練習のおかげで、体力がしっかりついているのも頼もしい。基礎（きそ）体力があると、プレーのレベルを底上げできる。

「望月って野球上手いほうだったんじゃない？　野球部から誘（さそ）い来なかった？」

何気なく聞くと、望月が眉（まゆ）をハの字にした。

「断りました。僕、プレッシャーがだめなんです。野球は自分のミスがチームに影響（えいきょう）するから、ずっと怖（こわ）くて。だから中学では個人②キョウギやるって決めてました」

「うーん。プレッシャーは、バドでもかかっちゃうかなー」

羽野が首を傾（かし）げて言う。そのとおりだ。凪人は望月を見上げた。

「個人きょうぎったって、団体戦なら自分の勝敗がチームに直で影響するし、個人戦だって結果次第じゃ次の大会のシード取れたり、出場枠数（わくすう）増やせたりするんだ。周りからの圧は結局かかるんじゃないの」

部の勝利、今後を有利にするシード権、学校名や周りの期待。そ

の重さを感じられるのは、背負う役目を与えられた人だけだ。
それを（2）うらやましいって思うやつもいるんだよ。
「エースとか、レギュラーになったらなおさらだけど。望月はそういうのになりたくないの？」
望月が答える前に、無駄（むだ）に大きい声が割りこんできた。
「ねーっ、そこで何してんのーっ！」
「あっ、渚（なぎさ）くん」
望月が凪人の後方を見た。以前、部活中にラケットギターで歌っていたあの一年男子、渚哲平（てっぺい）が、好奇心（こうきしん）の強そうなどんぐりまなこをらんらんとさせて立っていた。凪人よりも背が低く、バドミントン部員にしては珍（めずら）しく日に焼けている。人懐（ひとなつ）っこそうな雰囲気（ふんいき）を全身から発していて、凪人はマメシバを連想した。
「もっちーも羽野先輩も、いっつもここで何してんの？」
「久能先輩に練習見てもらって、いろいろアドバイス聞いてるんだ」
渚は大きくのけぞった。
「げっ、そんなマジメなことしてんの？　何で？」
「それは、できれば、僕も大会で勝てるようになりたいから」
「望月くん、上手くなってきたもんねー。楽しみ楽しみー」
羽野がうなずくと、
「ちょっと上手くなったって、＊桐星（とうせい）みたいな強豪（きょうごう）と当たったら終わりだよ。だったら部活なんて楽しけりゃそれでよくねー？　先輩たちだってそんな感じだしさー」
渚は首を振って言い、爆弾（ばくだん）を追加③トウカした。
「羽野先輩でさえ、和泉（いずみ）って人にどうしたって勝てないじゃん」
何だこいつ。むかっ腹が立って凪人は口を挟（はさ）んだ。
「じゃあおまえは今のまま、楽しく遊んで④マンゾクしてれば。羽野と望月は僕が勝たせるから放っといてくんない」
「うお、やーな感じー。何？　先輩、経験者かなんかすかー？」
「そうだよ」
「どんくらいバドやってたんすかー？」
「ジュニアクラブで五年間」
どこの、とは言わないでおく。
「じゃあ大会成績は？　クラブ内ランキングは？　オレには勝てる？　ねえねえねえ」
渚に詰（つ）め寄られる。やんちゃなマメシバにぎゃんぎゃん吠（ほ）えられているような気分だ。（3）痛いところを突（つ）かれて答えられずにいると、下で男子部長が集合をかけた。体育の時間にダブルスをしたおにぎりペアの片割れ、あの梅木が、三年生が引退した後の新部長だ。

羽野と望月は返事をしてすぐ一階に向かったのに、渚は凪人の前から動かない。
「それにさあ、勝たせるとか言うなら自分も入部して、いっしょに練習すりゃいいのに。何で入んないの？　本当は自信ないとか？」
「うるっさいな、こっちにも都合があるんだよ」
「なーんだ、そうやって逃（に）げるんだ。高いところから見下ろして口出すだけのくせに、えらそーにしないでくださーい」
渚は言いたいだけ言ってきびすを返し、いきおいよくかけ出した。振動（しんどう）で二階通路がゆさゆさ揺（ゆ）れる。
くそ、言い返せなかった。
一人残された凪人は、ぐたりと手すりにもたれ、目を閉じた。

船岡（ふなおか）ジュニアでの凪人は、全然、ぱっとしなかった。メンバーが約二〇人いた中で、凪人のランキングは最高が八位、最低でビリ。下位でうろついていることがほとんどで、年下のやつや後からバドミントンを始めたやつにもしょっちゅう負けていた。県内の大会にどうにか出られても、三回戦より先に進んだことはない。
思い出すのも、悔（くや）しかったことばかりだ。
「凪人の場所はここじゃないだろ」
整列しようとして、（4）誰（だれ）かにどんと背中を押（お）された。体調が悪くてクラブを二週間休み続け、ようやく練習に参加した日のことだった。
振り返ると、一人のチームメイトが列の最後尾（さいこうび）をあごで示した。
「先週のランキング戦休んだんだから、ケツに並べよな」
列の並びはランキング順になっていた。その順位を決めるランキング戦は不定期に行われ、不参加だと問答無用で最下位になる。
やっと、一〇位以内にランクインしたところだったのに。
こんなランキングの落ち方は初めてではなかった。でも、この悔しさに⑤ナれることはない。
落ちるならせめて、ちゃんと負けたかった。
のろのろと列の最後に向かおうとすると、
「さっさとしろよグズ！　具合悪いなら見学してろ」
列のトップに並んでいる航が凪人をにらんだ。兄弟げんかするなとコーチに注意され、ふんと前を向く。
うるさい、バカ航。心の中で言い返し、凪人は航からいちばん遠いところに並んだ。
二週間ぶりの練習は、まるで他人の体を使っているみたいだった。足が重いし、指先の⑥コマかな感覚も狂（くる）う。ミスが重なり、打ち合っている相手があからさまに迷惑（めいわく）そうな態度をとる。

違（ちが）う。こんなんじゃない。ぼくはもっと上手くできるのに。

イメージとじっさいの動きが重ならない。早く調子を取り戻（もど）さなければ。必死にシャトルを追っていると、監督（かんとく）が心配そうに声をかけてきた。

「凪人、病（や）み上がりでつらいんだろ。今日は無理しないで審判（しんぱん）やれ。人の試合見るのも大事な練習だぞ」

凪人は口を真一文字に引き結んだ。休んでしまった分、シャトルを打ちたかった。これではますますみんなに差をつけられてしまう。大会だって出られない。出たって、勝てない。

「（5）でも、ぼく」

「でもじゃない。また具合悪くなったらどうするんだ。おうちの人も大変だろう？　ほら、あっちのコートに行け」

ちゃんと、話聞いてよ！

叫（さけ）びは声にならなかった。監督に急（せ）かされ、凪人はしぶしぶコートを出た。言われたとおり、ゲーム中のコートで線審をしつつ、凪人はチームメイトの動きをじっと観察する。

あいつは、バック奥（おく）を攻（せ）められると弱いな。

こいつのフェイント、分かりやすいな。

チームメイトのくせや弱点に気づくたび、胸が【　A　】うずく。

気づいていたってどうにもならない。自分はこうして見ているばかりで、始めから勝負にならない。

ほかのみんなは、どんどん、上手くなっていくのに。

周りを意識してしまうと、ラケットを持って、バドミントンシューズを履（は）いている自分が、たまらなく恥（は）ずかしくなった。

どうしてぼくは、みんなのできることが、できないんだろう。

『勝ち負けより、努力が大事なんだぞ』と、監督とコーチは言う。

『できる範囲（はんい）でがんばればいいよ』と、お父さんとお母さんは言う。

『何でバドミントンやってるんだ？』と、チームメイトの目は言う。

その全部が、ぼくには『【　B　】』に聞こえるんだ。

きらいだ。みんなも、こんな自分も。

突然（とつぜん）、凪人は大きくせきこんだ。止まらなくて、体を⑦オる。コーチが急いで走ってきて、凪人の背中をさする。

触（さわ）らないでよ、大丈夫だよ。

手を振り払（はら）うことも声を出すこともできず、涙（なみだ）目になりながら顔を上げる。にじんだ⑧シカイの真ん中に、航がいた。

コートの中を思う存分走り回り、得意のスマッシュを堂々と決める。ナイッショー！　とチームメイトに声をかけられながら、航は

誰よりも楽しそうに笑った。

その瞬間（しゅんかん）、航に対する【　C　】とした敵対心が一気に凝縮（ぎょうしゅく）し、【　D　】とした輪郭（りんかく）を持った。

あいつに勝ちたい。このまま、負けっぱなしでいたくない。

ぼくじゃ勝てないっていうのなら、誰か、あいつをやっつけて。

打球音が不規則に重なって天井（てんじょう）に反響している。目を開けると、下では部員同士の打ち合いが始まっていた。

ジュニアのころも、こうやって遠くからみんなを見ていた。そうするしかなかった。今だって同じだ。入部していっしょに練習したって、きっと邪魔（じゃま）になって、かっこ悪い思いをするだけだ。

ここで口出す以外に、何しろっていうんだよ。

自ら引いた、羽野たちと自分を隔（へだ）てる線。納得（なっとく）しているはずなのに、（6）渚の言葉がいつまでも耳に残っていらいらする。

羽野も、凪人を口だけだと思っているだろうか。逃げていると、じつはそう感じているのだろうか。

だとしたら冗談（じょうだん）じゃない。それって、いちばんかっこ悪いじゃないか。

凪人はその場を離（はな）れ、一階に続く階段を下りた。

落合由佳の文章による

＊桐星　物語に出てくるバドミントンが強い学校。

問一　ぼう線①から⑧のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　この文章を「凪人が～する物語。」または、「凪人が～なる物語。」という一文でまとめなさい。ただし、「～」に入る言葉は「する」「なる」をふくめて三十字以上四十字以内とします。

問三　波線（1）「手を振った」のは、どのような気持ちで二人に手を振ったのですか。「凪人」の気持ちを十五字以上二十字以内で書きなさい。

問四　波線（2）「うらやましい」と「凪人」が思っている理由を考えて書きなさい。

問五　波線（3）「痛いところ」の内容を具体的に説明しなさい。

問六　波線（4）で背中を押した人が「凪人」に伝えようとしたこととして、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア　相手にがんばれよというはげましを伝える。

イ　相手にじゃまだという不快感を伝える。

ウ　相手に久しぶりに会えたという喜びを伝える。

エ　相手にかんちがいを正すという気づかいを伝える。

問七　波線（5）「でも、ぼく」に続く言葉を考えて書きなさい。

問八　【　A　】【　C　】【　D　】に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア　のんびり　　イ　しくしく
ウ　くっきり　　エ　もやもや

問九　【　B　】に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア　あきらめろ
イ　がんばれよ
ウ　上手くなれ
エ　はずかしい

問十　波線（6）「渚の言葉がいつまでも耳に残っていらいらする」とは、渚のどのセリフですか。最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア　「げっ、そんなマジメなことしてんの？　何で？」
イ　「さっさとしろよグズ！　具合悪いなら見学してろ」
ウ　「ちょっと上手くなったって、桐星みたいな強豪と当たったら終わりだよ。だったら部活なんて楽しけりゃそれでよくねー？　先輩たちだってそんな感じだしさー」
エ　「なーんだ、そうやって逃げるんだ。高いところから見下ろして口出すだけのくせに、えらそーにしないでくださーい」
オ　「凪人の場所はここじゃないだろ」

二　次の文章は獣医学（じゅういがく）の医師が書いたものです。文章を読んで、後の問いに答えなさい。

前例のないことをやるというのは、道なき道を歩くことに似ています。

どんな出来事も、そこから学ぶためのワンチャンスなんだと思って、今、目の前で起こっていることから、ひとつひとつ、学ぶしかないんです。

この経験を次に生かして、前に行こう。そして、同じ症例（しょうれい）がきたら、必ず次に生かしてみせる。そうやって前よりもちょっと、その次はさらにもっと、彼らを①スクうための力をつけていこう。私は、常にそう思ってきました。

それで真っ先に思い起こされるのは、一九九六年、オオワシやオジロワシが大量死する問題が起こったときのことです。

死因不明のオオワシの死体が野生生物保護センターに運びこまれてきたのは、私が赴任（ふにん）して二年めのことでした。見た目にはなんの傷もない。ところが解剖（かいぼう）してみると、胃の中から鉛（なまり）の散弾（さんだん）が出てきて、（1）私は即座（そくざ）に、これは鉛中毒だと確信したのです。それからも、センターには次から次へとオオワシやオジロワシの死体が運びこまれてきました。どの死体も無傷で、私はすぐに鉛中毒の検査をしました。

なぜこのとき、赴任して間もなかった私にそんな対応ができたのかといえば、学生時代に、やはり死因不明のコハクチョウの死体の解剖を頼（たの）まれたことがあったのです。そのコハクチョウも、やはり釣（つ）りのときに使う鉛のおもりを飲みこんでいた。そのときに、鳥の鉛中毒について世界じゅうの大量の文献（ぶんけん）を調べたことがありました。それでこのときも、ワシの体の状態（症状や＊剖検所見）から、鉛中毒を起こしたにちがいないと気づいたのです。

もしこの経験がなかったら、すぐに（2）手を打つことはできなかったでしょう。

ワシの胃の中からシカの毛が出てきたことで、ハンターが鹿（しか）を鉛の弾（たま）で撃（う）ち、猟場（りょうば）に放置されたその肉をワシが食べたことによって、鉛中毒で死んでしまったのだとわかった。鉛中毒の怖（こわ）さは、その個体が助からないというだけではありません。生態系への影響（えいきょう）がものすごく大きいんです。

ハンターたちは食用の部位だけを持ち去ると、獲物（えもの）をそのまま放置していくことが多い。鉛の銃弾（じゅうだん）で撃た

れたシカの死体がフィールドにあったとして、それを最初に食べるのは誰（だれ）なのか。

ほかを押（お）しのけて、まだ傷口もなまなましい肉の最初のひと口を食べることができるのは、最も強いワシです。ほかのワシを踏（ふ）み台にしながら、何年もかけてここにたどりついた最強のワシが、あろうことか、毒入りの肉を食べることであっさり死んでしまう。

強いものが生き残り、弱いものが滅（ほろ）びていくことが自然界のルールだとしたら、これは自然界のルールに反しています。強いものから先に死ぬだなんて、これはもはや【　A　】に関わる一大事なんです。このままなんの手も打たなかったら、ただでさえ②キショウなワシたちは、あっという間に全滅（ぜんめつ）してしまうかもしれない。

原因は鉛の銃弾です。

弾さえ鉛から銅に替（か）えてもらえたら、ワシは鉛中毒を起こさずにすむのです。

ぐずぐずしているわけにはいきません。私は、さっそくハンターの方たちにそのことをお願いすることにいたしました。

ところが、いざ行動を起こしてみると、なにかを変えるというのはそう簡単なことではないということが身にしみてわかりました。

銅の弾は鉛の弾よりも少し値段が高く、しかも鉛の弾のほうが命中率がいいといわれていましたから、私の訴（うった）えを快く思わない人も少なくなかった。なかには脅迫状（きょうはくじょう）めいた手紙をよこす人もいて、（3）道のりの険しさに途方（とほう）に暮（く）れてしまいそうになったこともあります。

しかし、私は、べつに「猟そのものをやめてほしい」と訴えているわけではないのです。

こういうときに、「敵」と「味方」にわかれて言い争ったとしても、なにも解決しないし、かえって事態が険悪になったりする。こういうときこそ、相手の立場に立ってものを考えなければ、信頼（しんらい）関係は絶対に生まれない。獣医師である自分にできることは、現場で起こっている事実をできるだけありのまま、辛抱（しんぼう）強く伝え続けることだけです。特定の誰かを＊糾弾（きゅうだん）するためではなく、できるだけありのまま事実を伝えるという③シセイが大事なんだと思います。ワシの死体の写真を突（つ）きつけられて、不快に思う人もいるでしょう。それをやり続けることは、精神的にもなかなかエネルギーのいることです。私のフェイスブックにアップされるのは、そんな写真ばかりですが、なかには関心を持ってくださる方もいる。野生動物と人間の共生という遠くの目標を見つめているからこそ、続けていられるのだと思います。

鉛中毒の問題は、猟ができる自然環境（かんきょう）をやがてダメにしてしまうかもしれない。やがてハンターの方たちの中にも、興味を持って、話を聞きに来てくれる人が現れました。ハンターは、猟についての④センモンカです。私のほうにも教わらなければならないことがある。問題を提起するだけではなく、相手の価値観によく耳を傾（かたむ）けること、現場をよく知る人に知恵を借りること、私は、このときにそれを学びました。

さまざまな価値観を検証していくうちに、それがつながって、ひとつのゴールが見えてくる。私たちは「敵」と「味方」ではなく、同じ問題を解決するために集まった「同志（どうし）」なんです。

鉛中毒の問題は、私にさまざまな経験と＊示唆（しさ）を与（あた）えてくれました。

傷ついた野生動物がいると、今まではそれを治すことで獣医師としての役割はいちおう終わったと思っていたんですね。でも元栓（もとせん）をしめなければ、水がじゃんじゃん流れっぱなしになるように、その個体が傷ついた原因を突きとめ、もうこれ以上は傷つかないように状況（じょうきょう）を改善しなかったら、この先も傷つき続けることになるわけです。

困難なことが起こったとき、それを見て見ぬふりができる人と、できるかどうかわからなくても半歩踏み出そうとする人がいます。

傷つき、病んだ野生動物たちの声をその最前線で聞く者として、私は、それを見て見ぬふりはできないと思う。自分になにができるのかわからなかったとしても、物言えぬ彼らに代わって、声をあげないわけにはいかない。

だから私は、それでも前に踏み出すのだと思います。

弱い者は死ぬ、強い者は生き残る。これが本来の野生動物の世界です。

そして、人間も、もともとは生態系のピラミッドの中にいる、野生動物の一員にすぎなかった。野生動物としての人間は、いかにもひよわで頼りない存在です。【　B　】の世界においては、きっと、クマにやられる人もいたでしょうし、トラにやられる人もいたでしょう。でもそれが日常的だったのは、はるか昔のことです。

子ども向けの絵本だと、よく生態系のピラミッドのてっぺんに人間が堂々と描（えが）かれていたりしますが、（4）私はあの絵は、まちがっていると思うんですよ。

ピラミッドのてっぺんどころか、もはやピラミッドから大きく外れてしまって、ピラミッドを丸ごと足蹴（あしげ）にして全部ぶっ壊（こわ）すことができるくらい、人類は文明という強大な力を持つ「神」になってしまっている。それなのに自分たちがなにをしでかしているのかに気づきもせず、自覚もないまま、⑤サイゲンなく

破壊（はかい）を繰（く）り返している。

（5）それが人類という種だと思います。

やろうと思えば、きっと一か月以内で野生動物たちが暮らしている森を全部、あとかたもなく切り尽（つ）くすことだってできるでしょう。生態系のピラミッドの中に、こんな身勝手で制御（せいぎょ）不能な種が、いまだかつていたでしょうか。

次から次へと運びこまれる鳥たちを治療（ちりょう）するうちに、目の前の一羽を治すことだけが、はたして獣医師の役割だろうか、と思うようになりました。もっとできること、やらなければならないことがあるんじゃないか。

彼らの痛みを知る者として、野生動物たちが伝えてきてくれる自然界の変貌（へんぼう）を伝えたい。

人間のせいで、傷つき、病（や）むことになった彼らのメッセージを、獣医学という言葉を通して人間の言葉に翻訳（ほんやく）することで、われわれと野生動物たちがすんでいるこの環境を改善し、治していく＊契機（けいき）になるかもしれない。

人間と野生動物が共に生きていくために、自然環境全体を⑥スエナガく健全な状態に戻（もど）していくこと。

そのために、私は、医者であり、野生の鳥たちの伝えたかったメッセージを人間の言葉に翻訳（ほんやく）する通訳であり、時には、人と野生の生き物が共に生きていけるよう仲裁（ちゅうさい）する、弁護士でありたい。「環境治療」と呼んでいるのですが、それが私のライフワークになったのです。

東日本大震災（だいしんさい）のとき、原発事故が起こって、自然エネルギーに対する関心が高まり、北海道でも、風力発電の風車がものすごくたくさん作られました。

その結果、その風力発電のブレード（羽）に当たって、四十羽以上のオジロワシが死んでしまったのです。そうすると、なかには、【　C　】と言い出す人も出てくる。

私は、これ以上鳥たちが傷つかないようにしたい。しかし、エネルギー問題として考えたときに、はたしてこれからもずっと風力発電を使わないという選択（せんたく）ができるでしょうか。なにかを「やめる」のは簡単です。ただ「やめる」と決めたとたん、それを「やる」ための技術や理論もとまってしまう。そうじゃなくて、今やるべきは、どうしたら人間は風というエネルギーを、自然や動物たちを傷つけることなく活用できるのかを考えることだと思うのです。

そもそも、ワシはなぜ風車にぶつかってしまうのか。

解剖の結果、死体はほぼすべて即死（そくし）でした。しかも、ぶつかったというより、上からたたき落されるように死んでいることがわかりました。原因は、目の錯覚（さっかく）でした。ブレードは、時には風速三〇〇キロの速さで動きます。猛（もう）スピードで動くものは、遠くにいるときは見えていても、近づくとふっと消えてしまう。ワシたちにとっては、自分たちが常に移動するルートに突然（とつぜん）現れては消える凶器（きょうき）だったのです。

どうすればこれを⑦フセぐことができるのか。

今はまだ模索（もさく）中ですが、必ず解決策はあるはずだと思っています。

楽観的すぎるかもしれませんが、私は、いわゆるガイア理論に共感するところがあります。なぜって、ガイア理論の考え方というのは、私の診（み）てきた野生動物の体で起こっていることそのものだからです。

ガイア理論では、地球はひとつの生命体だと考えます。そして、もし地球が壊れてしまうようなにかが起こったときには、それをとめようとする力がどこかで働くのだと。

それはそのまま、ある動物が病気になると、その病気を排除（はいじょ）しようとそれに対抗（たいこう）する特殊（とくしゅ）な白血球が現れることと、とてもよく似ています。

だとしたら、私はこの白血球のひと粒（つぶ）のようでありたいのです。

もし地球を壊そうとするなにかが起こったときには、それに異を唱え、それをどうにかして食いとめようとする人間でありたいと思う。

傷つけた原因が人間にあるのなら、傷つけない解決策を見つけることも必ずできるはずです。人と人、そして、人と野生動物たち、われわれは「敵」と「味方」ではなく、この地球上で共に生きる「同志」だと思うのです。

齊藤慶輔の文章による

＊剖検所見　解剖して調べて、分かったこと。
＊糾弾　強く問いただすこと。
＊示唆　それとなく示すこと。
＊契機　きっかけ。

問一　ぼう線①から⑦のカタカナを漢字に直しなさい。
問二　波線（1）のように筆者が確信できた理由を書きなさい。
問三　波線（2）「手を打つ」の意味を十五字以内で書きなさい。
問四　【　A　】に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。
ア　ハンターの生活
イ　生命の起源
ウ　食料問題

エ　種の保存

問五　波線（3）のようになっても、筆者がやり続けられた理由を書いた部分を二十七字で文章中から探して、はじめとおわりの四字を書きなさい。

問六　【　B　】に入る野生動物の世界を表す四字熟語を書きなさい。

問七　波線（4）のように筆者が考える理由として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア　人間はあまりにも強大な力を持ってしまったから。
イ　人間は野生動物と戦っても勝つことができないから。
ウ　人間が野生動物を保護しなければならないから。
エ　人間と野生動物はちがう世界に住んでいるから。

問八　波線（5）にこめられた筆者の思いとして、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア　安心　　イ　同情　　ウ　批判
エ　自信　　オ　願望

問九　【　C　】に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア　オジロワシを捕獲（ほかく）してしまおう
イ　風力発電そのものをやめよう
ウ　ちがう場所で風力発電をしよう
エ　発電方法の種類を増やそう

問十　この文章の筆者の主張を、六十字以上八十字以内でまとめなさい。

2018 学習院 一回

'18 男中 第一回

国語解答用紙

受験番号

一

問一
①
②
③
④

問二 凪人が

問三

問四

問五

問六

問七 でも、ぼく

問八 A C D

問九

問十

⑤ れる
⑥ かな
⑦ る
⑧

30

40 物語。

15

20

二

問一
① う
② く
③ ぐ
④

問二

問三

問四

問五 はじめ おわり

問六

問七

問八

問九

問十

80

60